

社 会（中）部 会

I. 研究の概要

1. 研究主題 変化が激しい時代の中で、自ら社会を創造する子どもの育成
～社会的事象への関心を高め、見方・考え方を働かせ、自ら思考・判断・表現する授業を通して～

2. 主題設定の理由

令和2年度から研究主題を「変化が激しい時代を乗り越え、自ら社会を創造する子どもの育成」と設定し研究に取り組んできた。令和5年度からは主題をそのままに、副主題を「対話を用いた主体的な学びと学習者が自ら課題を創り出す授業を通して」と定め、2年計画で自ら課題を見つけ出す力を身に付けたり、解決するために仲間と協働しながら考え創り上げたりする力を高め、「自ら社会を創造する子どもの育成」を目指す研究を進めてきた。

今年度は研究主題を「変化が激しい時代の中で、自ら社会を創造する子どもの育成」、副主題を「社会的事象への関心を高め、見方・考え方を働かせ自ら思考・判断・表現する授業を通して」と変更し、研究を進めることとする。ここ数年で社会は急激に変化し、今後とも不確実で予測不可能な時代が続くと言われている。また、我が国の学校教育には多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の造り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。よって、「自ら社会を創造する子どもの育成」を目指す方向性は前研究と同様である。

石中社では、「自ら社会を創造する」ことを、上記のような予測不可能な時代を乗り越えるために、「子どもたちが自信をもって自分の人生を主体的に切り拓き、よりよい社会を創り出していくこと」と定義している。子どもたちが自信をもって自分の人生を主体的に切り拓いていくために、社会的事象への関心を高めることを通して、「変化が激しい時代」を生きているということを生徒に実感させる必要があると考える。また、その上で、社会的な見方・考え方を働かせながら思考・判断・表現する経験を通して生徒が「自ら社会を創造する子どもの育成」を目指す。この「社会的な見方・考え方」については、平成30年度から平成31年度（令和元年度）に石中社として研究を進めた経緯がある。引き続き、過去を振り返ったり、現代・未来を創造したりすることを見据えた「見方・考え方」を働かせた授業を部会全体で創り上げていきたい。

以上のことを研究主題・副主題の趣旨として、今年度より新しく研究を進めることとした

3. 研究仮説

社会的事象への関心を高め、見方・考え方を働かせ自ら思考・判断・表現しようとすることができる授業を展開することで、「変化が激しい時代」を実感し「自ら社会を創造する子ども」を育成することができる。

4. 研究の年次計画

- 1年次…社会的事象への関心を高められる授業の展開
- 2年次…見方・考え方を働かせ、自ら思考・判断・表現する授業の展開

5. 研究方法

- (1) 市町村研究部会と連携を図り、推進委員を通して部会員に研究内容を周知して、個人単位または学校単位で課題に取り組む。そして、その成果を専門部会第二次研究協議会で交流する。
- (2) 研究内容を踏まえた授業について、公開授業担当市町村から出された授業者と共同研究者、本部会役員等で検討を重ね、専門部会第二次研究協議会で公開する。また、北・中・南の各ブロックで研究授業を公開し、研究協議を行う。
- (3) 研究員及びプロジェクト研究員（小委員会）が中心となって研究試案を作成することを通して、部会員に研究の方向性を周知する。

Ⅱ. 実践の経過と成果

1. 実践研究の経過

4月15日(火) 中旬	専門部会第一次研究協議会、第1回役員研修会、第1回推進委員研修会 市町村第一次研究協議会
5月13日(火)	専門部会役員研修会
6月6日(金)	第2回推進委員研修会、第2回役員研修会
8月7日(木) 18日(月) 25日(月)	実技理論研修会 指導者：大塚 憲司(研究員)、第1回公開授業研修会 第2回公開授業研修会(地理分野)、第4回役員研修会 第2回公開授業研修会(歴史分野)、第4回役員研修会
9月18日(木)	第3回推進委員研修会、第3回公開授業研修会、第5回役員研修会
10月9日(木) 10日(金) 17日(金)	第4回公開授業研修会(広葉中プレ授業) 第5回公開授業研修会(大曲中プレ授業) 専門部会第二次研究協議会
11月14日(金)	第6回役員研修会
12月20日(金)	第7回役員研修会
1月中旬	第4回推進委員研修会、第8回役員研修会
2月上旬	各市町村第三次研究協議会
2月中旬	第5回推進委員研修会、第9回役員研修会

2. 研究を推進するためのプロジェクト研究員による実践発表について

今年度も、様々な研修会や公開研究授業等、各市町村の推進委員の先生方にご協力をいただきながら、共同研究の歩みを進めることができた。

研究を進めるための参考として、実技理論研修会で研究員より今年度の研究について説明した。また、プロジェクト研究員による実践発表(地理分野、歴史分野)を行った。さらに、専門部会第二次研究協議会の全体会の場でも、プロジェクト研究員による実践発表(公民分野)を行い、三分野を網羅した内容を部会員に発信することができた。

3. 専門部会第二次研究協議会での交流研究

(1) 交流内容(公開授業指導案)

2学年 地理的分野 授業者：佐野教諭(北広島市立大曲中学校)

本時の目標：近年の異常気象や自然環境の変化に気づき、「これからの暮らしの工夫」について考察し、表現できる力を養う。

本時の様子

段階	時間	学習活動	教師の指導・支援	学習評価
導入	10分	○ふりかえりと問い直し。 ・クロームブックの準備(約1分) →前時までに作成した「北海道の今!」スライドを開く。 ・動画の視聴(約4分) (「209X年8月の北海道の天気予報」) ・単元で学んできたことの中で、北海道の自然環境の変化による現状の問題・課題となっていること(各自で調べたこと)をふりかえる(約3分)	○生徒が作成した「北海道の今スライド」を開かせ、前時までをふりかえらせる。 ○動画「未来の北海道」の内容と、スライドで調べた北海道の自然環境の変化をもとに、「気候」に焦点を当てて、これまでの暮らしと現在の自然環境の変化を比較し、そこから現状の問題や影響をふりかえり、本時の課題を見いだすように指示する。	

		スライドの例 例〈自然環境の変化とその変化による影響〉 ・農業：名産であるじゃがいもの不足 乳牛の夏バテ ・漁業：名産である昆布の漁獲量の減少 ・観光：雪不足による冬のイベントの中止	【研究とのかかわり】 ・導入の工夫 →動画の視聴で北海道の自然環境の変化についての興味を持たせる ・切実性・必要性 →動画の内容から「激しく変化する社会を生き抜くための生活の工夫」を自分事として考察させていく	
展開	35分	《学習課題》 自然環境が変化する中で、北海道の産業が生き続けていくためにはどのような工夫が必要だろうか。 展開①(25分) ○1～5時間目でふれた自然環境の変化による現状の問題・課題の中で、事前に選んだテーマ(農業、漁業、観光の中から一つ)の「産業が生き続けるための工夫」についてを調べ、考える。 →「産業が生き続けるための工夫」をミライシードのボードにまとめる 【研究とのかかわり】 ・導入の工夫 ・学びに向かう気持ち →1～5時間目に作成したスライドで自分の調べたことを元に課題について自身の考えをまとめる 展開②(10分) ○グループ(3～4人)で共有する。 →他のテーマでも同じテーマでも、様々な産業が生き続けるための工夫の視点や考え方、取り組みを知る	○他の人の進捗状況や考えをみても良いこととし、個人活動を活発にさせる。 ○ミライシードの共有機能を活用し、他の子の視点などにも気付かせる。必要に応じて、全体の指示または個人への指示を行う。	【評価】 ミライシードのボード
終末	5分	○共有したことも踏まえて、振り返りを行う。 <u>活動に対する予想</u> 気候変動で農業や漁業に影響が出ていると知り、自然と人の生活が深く関わっていると感じた。 自分たちの暮らしを守るためにも、自然を守ることが忘れずにいたい。 小さなことでも、できることから環境にやさしい行動をしていきたいと思う。 ○振り返りを書き終えたら提出する。	○単元を貫く課題「教科書の知識と現実を比較しながら、自然環境と密接に関連する北海道地方のこれからの暮らしを考察しよう」にそって、ふりかえるよう全体に指示を出す。	

1 学年 歴史的分野

授 業 者：清水教諭（北広島市立広葉中学校）

本時の目標：古代の日本の税の制度は当時の日本にどんな影響を与えたのかを表現している。

本時の様子

段階	時間	学習活動	教師の指導・支援	学習評価
導入	5 分	○3 節を通して、税の制度が変遷していったことを確認する。 ○フィグジャムの「律令国家の税」のシートを見て、様々な税があったことを確認する。 ○国民負担率のニュースの記事を見て、現代でも税の負担が大きいことを確認する。 ○3 節で出てきたこれらの税によって、日本にどんな影響があったか考える。	○ここでは、生徒には詳しい内容までは答えさせずに、端的な回答で抑えさせる。 ○この後に活動に入るので、長い時間は取らずに進めさせる。	【研究】 切実性・必要性 【研究】 導入の工夫
展開		学習課題：古代の日本の税の制度は、当時の日本にどんな影響を与えたのだろうか。		
	15 分	○PC タブレットを使い、「律令国家の税」のシートを見ながら、庶民、貴族のそれぞれの身分に、税がどのように関わっていたのかを、時代ごとに、フィグジャムの表の中に付箋を入れて、まとめる。	○困っている生徒の手立てとして奈良時代の税制の表を見せて、付箋で打ち込ませる活動に役立てる。 ○それぞれの身分が、税を「払う立場」か「使う立場」かの視点を与える。	【研究】 学びに向かう気持ち
	15 分	○それぞれの身分にとって、税がどのように関わっているのかを記入させた表を参考にしながら、身分ごとに時代が進むにつれ、どのような変化や特徴があったかを、グループで考えさせ、フィグジャムのシートに記入する。	○ほかの班のフィグジャムシートを見てもよいこととし、話し合いを活発にさせる。	
	5 分	○グループで話し合ったことを各グループの代表が発表をする。	○他のグループが発表しているとき、気づいたこと・わかったことをメモする欄をメモとして活用させて、終末の作業に役立てる。	
終末	10 分	○古代の日本の税の制度は当時の日本にどのような影響を与えたのかをスプレッドシートに個人で記入する。	○本単元で学習した語句を用いながら自分自身の考えを書かせる。 ○税というものが国家を運営する上で重要なものであることを話す。	【評価①】

(2) 協議内容

①公開授業

討議の柱

- ① 生徒が切実性・必要性を感じ、学びに向かう気持ちを高めることができたか
- ② 生徒の学びに向かう気持ちを、「知識・技能の習得」「社会的な見方・考え方を働かせた思考・判断・表現」につなげることができたか
- ③ 「導入の工夫」が単元や本時の学習(展開・まとめや振り返りといった終結)に効果的に生かされていたか

【歴史】

- ・導入で現代の税を題材として出したことで、生徒の学びに向かう気持ち(切実性)を高めることができた。
- ・税の負担が主に取り扱われていた。庶民、貴族、国家、天皇という立場を設定することが、「社会的な見方・考え方を働かせる」ことにつながったのではないかな。
- ・導入でふれた現代の税の負担率を示す資料を、まとめの場面で再度提示することが効果的だったように感じた。
- ・授業者の話す場面が必要最小限であった。また、生徒が活動する場面が多かったことがよかった。等

【地理】

- ・導入で気候変動を扱ったことが、生徒が切実性を感じることに繋がった。一方で、VTRの印象が強いことで、生徒の思考が北海道の人々の暮らしよりも地球温暖化に向かってしまった部分もある。
- ・単元で学んできたことがよくわかる授業であった。立場(生徒たち目線なのか、農家目線なのか等)を明確にしてあげることが必要だったのではないだろうか。
- ・前時までの授業が本時の導入であるという考え方が画期的であった。また、北海道地方の学習の流れが、今後の各地方の学習にそのまま活用できる。そういった意味でも、北海道地方の学習自体が各地方の学習の導入になっているとも考えられる。等

②分科会

レポート交流の主な視点

- ① 生徒が切実性・必要性を感じ、学びに向かう気持ちを高めることができる手立て
- ② 生徒の学びに向かう気持ちを、「知識・技能の習得」「社会的な見方・考え方を働かせた思考・判断・表現」につなげることができる手立て
- ③ 「導入の工夫」を単元や本時の学習(展開・まとめや振り返りといった終結)に効果的に生かす手立て

【交流された主な内容】

- ・生徒の「なぜ?」「知りたい」といった気持ちをどのように大事に育ててあげるべきか。
- ・生徒が主体的に活動する場面を設定することも大切であるが、教師から教科書の内容をしっかりと教える場面も当然必要である。
- ・歴史的事象と現在の事象とつなげ方。
- ・歴史分野の学習では、生徒に切実性を持たせることが少し難しい。
- ・資料を読み取る力の育成。等



Ⅲ. 教育課程の研究

1. 研究の経過

昨年度同様、主に「年間指導計画と学力テスト等の調整」について重点的に取り組んだ。

2. 研究の成果・課題

全体会の場で、教科書会社による新しい教科書の内容や活用方法等について説明していただいた。新しい教科書への移行も見据え、次年度も「年間指導計画」および「学力テストの範囲」の調整を図っていく。

Ⅳ. 実技・理論研修会

研究員より「研究主題・副主題設定」に関わって、「生徒像」「授業像」「重点となる実践」等を下記の内容をもとに説明し、また、プロジェクト研究員により地理分野・歴史分野の実践発表を行うことを通して、研究の方向性とゴールについて部会員と共有を図ることができた。

【石中社として育てたい生徒像】

- ①「変化が激しい時代」を**実感できる**生徒
- ②自ら社会を**創造することができる**生徒

【石中社として目指す授業像】

- ①社会的事象への**関心を高められる**授業
- ②社会的な見方・考え方を働かせ、自ら**思考・判断・表現する**授業

【目指す授業像の実現のために、今年度も実践を積み重ねていきたいこと】

- ICTの活用 ○単元デザイン ○学習課題の設定 ○題材の設定 ○教材・教具の工夫
- 導入の工夫** ○発問の工夫 ○指導内容の精選 ○学習活動・形態の工夫（個別最適な学び・協働的な学び等） ○思考ツールの活用 ○板書の工夫 ○ワークシート・ノートの活用
- 資料提示・活用の工夫** ○学習のまとめ・振り返りの工夫 等

【実践を積み重ねていくことを通して、今年度、特に研究の成果と課題の共有を図っていきたいこと】

- 1年次 「導入の工夫」 ※「導入の工夫」 > 「資料提示・活用の工夫」**
- 2年次 「資料提示・活用の工夫」 ※「導入の工夫」 < 「資料提示・活用の工夫」**
 - ⇒生徒が切実性・必要性を感じ、学びに向かう気持ちを高めることができたか（1年次・2年次）
 - ⇒生徒の学びに向かう気持ちを、「知識・技能の習得」「社会的な見方・考え方を働かせた思考・判断・表現」につなげることができたか（1年次・2年次）
 - ⇒「導入の工夫」が単元や本時の学習（展開・まとめや振り返りといった終結）に効果的に生かされていたか（1年次）

Ⅴ. 部会研究の成果と課題

1. 成果

全部会員で同じ方向を向き研究を進めるため、石中社として「育てたい生徒像」「目指す授業像」等を明確に示すことができたこと、まずはこのことが成果であると言える。今年度、特に単元や授業の「導入の工夫」について、様々な場面で共有を図った。色々な場面で共有を図ったことで、「育てたい生徒像」「目指す授業像」につながる、学習意欲の向上、学習の方向性の提示等効果的な「導入の工夫」について、部会全体で研鑽を深めることができたのではないかと考えている。

2. 課題

次年度、「導入の工夫」を意識しながらも「資料提示・活用の工夫」について実践を積み重ねていくこととなる。社会科の授業は、問いと資料によって作られる。「資料提示・活用の工夫」とは例えば、その問いを見つけるための資料提示の工夫となるであろう。

今年度の成果を生かしつつ、先ほどの例の他に「資料提示・活用の工夫」にはどのようなものがあるのか、研究主題で掲げている生徒の育成を図るため、今年度同様、次年度も全部会員でアイデアを出し合いながら実践を積み上げていけることを心から期待している。

（文責 大塚憲司）